

ペルソナの固有名——基礎神学的素描

佐々木 徹

序

われわれは、通常の生活において時折、相互的な人間関係の善性を存続させてゆくために「互いの人格を認め合うこと」を確認し合ったりする。また「・・・の人格を認めよ」との願いを発信するときもある。その人格は、他者の人格であったり、自己の人格であったりする。そのような場合、畢竟、「他に掛け替えのない、Pという個体（個人）を尊重せよ」との要求が掲げられていると考えられる。本稿はこのPをペルソナ（人格）の固有名であると捉え、人格的存在者である人間の尊厳の究極に関して考察を進める。本稿の筆者はカトリック神学の徒であり、考察には神学上の知見が叙述される。本稿では基礎神学の準備となる考察がなされるのであり、それとともに本稿の考察は神学的倫理学と交差交流し、宗教哲学の領野と内容的に重なり合って、キリスト教信仰の意義についての弁明⁽¹⁾に資することを願うものである。さらには、本稿が人間に関する哲学や人間諸科学一般にとって、いささかの刺激となり得るなら、筆者にとって望外の幸いである。

われわれが生活し、生きる社会は、素朴な信念のレベルでは人格の尊厳を大切にする近代社会であるはずなのだが、現代の日本社会では——これは日本だけの問題ではないであろうが——しばしば起こる冤罪事件の例⁽²⁾に顕著に見られるように、一人一人の人間の掛け替えのなさが尊重されているとはいえないし、それとともに人間の命の真の重みも軽んじられてゆくことになるのではあるまいか。実際、冤罪事件など決してあってはならないことだが、日本では冤罪によって、死刑判決が申し渡されることもあるのである⁽³⁾。先に「人格」という言葉を用いたが、よく知られたI・カント（Immanuel Kant）の次のごとき実践命令が思い起こされる。

「汝は、汝の人格（Person）における、且つ又あらゆる他者の人格における人間性（die Menschheit）をいついかなるときにも同時に目的（Zweck）として用い、決して単に手段（Mittel）としてだけ用いぬように行なせよ。」⁽⁴⁾

これをもって諸個人の人格の尊厳が謳われていると理解することもできようが、本来掛け替えのない個別的であるはずの、「汝」あるいは「私」やその他の他者たちの個々の諸人格が「人間性」という理念の一般性のうちに曖昧にされ解消の危機にさらされていることにもなっているのではないだろうか。J-P・サルトル（J-P. Sartre）は「誰でも幼年時代に」「経験する」「突発的で、圧倒的な自意識の目覚め」について、『ジャマイカ島の颶風』（ヒューズ著）⁽⁵⁾を引き合いに出しながら次のように述べてヘーゲルに言及している。

「この閃きのような直観は、完全にむなしいものであった。この子供は自分が誰でもいい人間ではないという確信を得たのだ。ところで彼女はこの確信を得たため

にまさしく誰でもいい人間になったのだ。彼女が他の連中と違うことはたしかである。だけど他の連中も皆同じように他者なのである。彼女は別離の全く消極的な経験ををしたのだが、その経験には主観性の一般的形態、つまりヘーゲルが自我＝自我という等式によって定義した無益な形態が取入れられている。』⁽⁶⁾

カントやヘーゲルが、近代社会形成の基盤を思想的に表現して影響力のある哲学者であったことを思えば、近代社会における我々の人格としての尊厳は、意外にもろい基盤の上で成立しており、他の人格と取り替えられてしまうということがさほど困難でもないような情勢におかれているということを、引用したカントの言葉とサルトルのヘーゲルへの批判的言及は示していると考えられる。全ての人間が「かけがえのない私」に均一化され、真の「我」の掛け替えのなさ（代替不可能性）を喪失する、もしくは喪失させられるような社会になっており、このような社会では地上の命を超える「永遠の価値」あるいは「永遠の命」への思いも抑圧されるのではないだろうか⁽⁷⁾。「人間もめっきり評判を落としたものだ」⁽⁸⁾と言われる時代にあって、本稿は、希求されるところの「人間復権」⁽⁹⁾の方向を探ろうとするささやかな試みなのであるが、その突破口を既に冒頭で示唆したように、人間もしくは個別的ペルソナの固有名（*nomen proprium*, Eigennamen），即ちわれわれが通常の生活で書いたり述べたりする、あるいは少なくとも、必ずしょっちゅう耳にする「人の名前」に見出すのである。例えば、入園客で混雑する動物園で「太郎」という名のわが子が迷子になったとき、両親は「太郎」の名を呼んだり叫んだりしながらわが子を探すのであるが、そのような折、「太郎」という名を音声表示すれば、自動的に所望するものが出てくるかの如く、わが子が出現するなどと思っている親などいるはずがないのである。迷子になったわが子を探す親は、「太郎」というわが子の固有名を叫ぶことによって、太郎という人格そのものを切実に希求しているのである。「太郎」という名（固有名）は、まさに太郎という人格的実体そのものなのである⁽¹⁰⁾。人間の固有名は、非人格的事物の固有名とは異質である。例えば本日朝刊の「朝日新聞」であれば、自宅のテーブル上の「朝日新聞」と、駅の売店の「朝日新聞」は代替可能で、自宅のものをかばんに入れ忘れたなら売店で購入して読むこともできる。しかし、人間の固有名の場合はそのようなわけにはいかない。即ちよくあることだが、同姓同名の場合、同じ会社の人間であれば営業部の「中村太郎」と、経理部の「中村太郎」とが混同されないように、社内で配慮しなければならないのは当然である。以上の例においては、ペルソナの固有名が、単なる記号としてのみ取り扱うものとされることを拒絶するものであることが見て取れるのではあるまいか。確かに、上記の「朝日新聞」の場合も、紙面には人格の世界の刻印やそれとの連関が存在し、読者もまた紙面を通して人格の世界との関係に入るとも考えられ、又実際そのようになるのであろうが、本稿はそのような次元に留まらず、その根源を求めてペルソナの固有名の絶対的で最も本来的な次元へと突破してゆくことを目指す。また、その故に形而上学への方向性が主張されることにもなる。

註

- (1) Vgl. Christoph Böttigheimer, *Lehrbuch der Fundamentaltheologie*, Herder, 2009, S. 58f.
- (2) 2013年10月19日の『朝日新聞』の「天声人語」では、冤罪事件の例が挙げられ、回を重ね長期にわたる再審請求に関しては次のように述べられている。「・・・『遅れた正義は無いに等しい』という言葉が、胸に浮かんで消える。」
- (3) 先の註(2)を参照。もとより、本稿の筆者である私は、死刑制度には断固反対である。
- (4) Immanuel Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Philipp Reclam Jun. Stuttgart, 1980, S. 79. (原文はイタリアック)
- (5) ジャン＝ポール・サルトル, 『ボードレール』, 佐藤朔訳, 人文書院, 1973年, 11～12頁。
- (6) 同上。尚, 次を参照。G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp, 1984, S. 578f, 586ff.
- (7) 加藤美紀, 「『生きる意味、を教えることはできるか』(『カトリック研究所 論集』第18号, 仙台白百合女子大学カトリック研究所, 2013年, 31～67頁)の44～45頁では立派な問題提起がなされている。
- (8) 木田元, 「解説 「宇宙における人間の地位」 新版に寄せて」(マックス・シェラー, 『宇宙における人間の地位』, 白水社, 2012年), 239頁。
- (9) 同上参照。
- (10) このような「名」の現実の受け止め方は、『聖書』においても顕著である。Vgl. Hans Bietenhard, ὄνομα, in: *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* V, Kohlhammer, 1990, Studienausgabe, S.251ff. さらに、『聖書事典』(日本基督教団出版局, 1979年), 628頁「な(名)」の項目参照。

I. ペルソナ(人格)の出来事としての固有名

全ての人間を人格として尊重するといっても、そこには常に、掛け替えのない個別的人格を人格一般の理想、人間性の理念の内に消滅させてしまう可能性が伴うであろう。個別的人格を個別的なものとして擁護するためには、ペルソナの固有名という事柄(名の現実)が受容されていなければならない。ユダヤ人哲学者・文学者であるW・ベンヤミン(Walter Benjamin)は、ペルソナである人間の固有名について次のように言う。

「・・・固有名(Eigenname)は、人間の音声における神の言葉である。固有名によって、どの人間にもその神による創造が保証され、そしてこの意味において固有名そのものが創造的である。それは神話風の知恵が、人間の名は人間の運命であるという(たしかによくある)見解において述べているようなことである。固有名は≪創造的な≫神の言葉との、人間の共同である。」⁽¹⁾

このようなベンヤミンの、人間の固有名に関する洞察をキリスト教はユダヤ教とともに受容することができよう。固有名において、『旧約聖書』の「創世記」に記された、人間の神の似像性⁽²⁾が最高度にきわだつのである。神的人格である唯一の神の存在に対応する、真に掛け替えのない個別の人間の人格存在そのものが、各々の人間の固有名なのである。「あらゆる、あるいは全ての人間の固有名」と言う場合に、結局は固有名一般の理念にそれは解消するのではないかといった疑問は杞憂であろう。「固有名」という名辞もしくは概念のみが考察される場合には、そのような抽象化も起こりえようが、固有名という事柄あるいは固有名の現実が絶対に代替不可能な人格の出来事として、そのような一般化・抽象化を拒絶するからである。同姓同名の場合も、その名を名のる者らを、われわれは実

生活の中で代替可能なものとして扱うわけにはいかないのである。またこのような固有名という事柄を考察し、名の現実に向き合うことによって、われわれは真に他者の尊厳の確保に至ることができるであろう。各々の個別的人格の侵犯してはならない聖性が固有名として現れてくるのである。このような絶対に代替不可能な人格の現れこそ、あらゆる一般化・抽象化を拒絶する固有名の出来事にほかならない。親などによって名付けられた固有名以外に、霊名、ペンネーム、芸名、四股名、愛称、綽名なども、それらが単なる固有名詞ではなく人間共同体における固有名として存在し機能するなら、以上のごとき個別的人格の聖性の其々の仕方での現れ・出来^{しゅったい}であると考えられる。名付けるとは、絶対に代替不可能な人格が、自らを記号化する出来事なのである。従って、ペルソナ（人格）の固有名は、決して単なる記号としてのみ扱われてはならないのである。現れた個別的人格そのものとして固有名は大切にされ尊重されねばならない。母親の胎内にあって、いまだ名付けられていない胎児も、やがて名付けられねばならない人格的存在者として、取り替え不可能な個別的人格としての聖性と尊厳に満ちているのである。ペルソナの固有名の現実には、名という記号における代替不可能な人格の受肉の出来事として、それ自体あらゆる一般化・抽象化・概念化を拒絶するゆえ、ペルソナの固有名へのさし向いにおいて、われわれは、言語の限界⁽³⁾に突き当たっているのである。ペルソナの固有名によって、われわれはこの言語の限界の此岸から、この限界の彼岸、向こう側を予観（予感）し、あるいは見渡す経験をすることになるのであるから、ペルソナの固有名へのさし向いは、われわれの重要な形而上学的経験の一つであるはずである。ペルソナの固有名へのさし向いの出来事において、世界と自己の全体が、他者と共なる秘義的な人格の世界として意味づけられ、この世界の秘義的な全体性がそれ自体限界づけられた（即ち、初めと終わりがある）救済史として現れ、われわれは、言語の限界を自覚しつつ、この限界の彼岸へ、宗教的・形而上学的言語を練り上げつつ探究を進めることになるであろう。ペルソナの固有名へのさし向いの出来事は、救済史としての世界の限界づけられた全体性の自覚をもたらす故、それは終末論的経験である。さらに、ペルソナ（人格）と言うと、意識の明晰性や意志の自発性に重きが置かれるが、死の床について意識がなくなった者であっても、その固有名前によって個別的人格は聖性と尊厳の重みを失わないのである。犬のようなペットの動物も、野生の状態から、人間によって固有名を与えられた存在へと移行した者として、人間と同じではないがペルソナ的尊厳を具現する存在者として扱われねばならない。複数の人間の組織体が法的人格である場合、それは社名、校名等固有名をもつことになるが、やはりこれも疑似ペルソナ的存在者として、蟻の社会やフラミンゴの群れなど、所謂動物の社会組織からは区別されねばならないに違いない。固有名をもつ人間の法人組織は、あらゆる個体が大方の行動を本能に決定されていて自らの組織体の機械的部品のごとき動物の社会とは異なるものでなければならないはずである。人間の法人組織で個人は組織の歯車・部品であってはならず、各々その尊厳が承認されているのでなければならないのである。人間の組織あるいは社会とは、そういうものでなければならない。従って、「蟻の社会」という際、その「社会」という言葉はメタファーの語にすぎないと言わねばならないのである。それゆえにまた他方、かつてナチスがアウシュヴィッツ等の強制収容所で行った収容者の固有名の剥奪と数字番号化や、帝国主義時代の日本の歴史の中で被支配者に対してなされ

た不本意な和風の固有名創出などは、まさに人格の尊厳への冒涇にほかならないのである。

註

- (1) Walter Benjamin, *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*, in: *Gesammelte Schriften II · 1*, Suhrkamp, 1991, S. 140-157, S. 150.
- (2) 『旧約聖書』「創世記」第1章26～27節を参照。
- (3) 「言語の限界」なる表現は、L・ヴィトゲンシュタインから拝借した。Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp, 10. Aufl., 1995, S. 67, 5.6には次のように記されている。「私の言語の諸限界は、私の世界の諸限界を意味する。」

Ⅱ. 神 名

先に述べた、人間の人格としての尊厳を究極的に確保する固有名の現実の根拠は、神の恩恵であり、それは神の名の現実であるから、本章では、キリスト教における神名（神の固有名）について考察する。

『旧約聖書』において、神即ち「ヤーウェという名（der Schem Jahves）」は「汝ヤーウェ」（「エレミヤ書」10章6節、「箴言」18章10節、「マラキ書」1章11節、14節、2章5節等参照）御自身であり⁽¹⁾、「ヤーウェの名は決して、呪術の手段ではなく啓示の贈り物である。」⁽²⁾ 旧約聖書学者のF・ハルテンシュタイン（Friedhelm Hartenstein）は神名を論じつつ、『旧約聖書』の諸証言においては、固有名（Eigennamen）が人格（Person）を本質的・実体的に具体化する（verkörpern・受肉させる）ことができるほどに、固有名は人格と密接に結びついている、と主張する⁽³⁾。このことは『新約聖書』において「父・子・聖霊の名（τὸ ὄνομα τοῦ πατρὸς καὶ τοῦ υἱοῦ καὶ τοῦ ἁγίου πνεύματος）」によって洗礼を授けるように（「マタイによる福音書」28章19節）命ぜられるところの神名、即ち《父・子・聖霊》（名 [τὸ ὄνομα] は単数）⁽⁴⁾ についても同様であると考えられる。福音主義の神学者K・バルト（Karl Barth）によれば、「啓示された神名において明らかな神のこの本質はしかし、父・子・聖霊としての神の存在であり、故に父・子・聖霊としてのその行為である。」⁽⁵⁾ 神の啓示はまさしく神の自己啓示、神の名の啓示であり、この神名は神の最内奥の、隠された本質の名であるという⁽⁶⁾。三位一体の神にあっては、その存在と本質と行為は神名と一であるのである。人格あるいはペルソナの尊厳は神名によって最高度にして絶対的な尊厳に達しているのである。又、神であれ人間であれ、人格的存在者の人格としての尊厳が、固有名から剥離されて考察される場合、この尊厳は人格一般の理念の中に解消し見失われる危険があると言わねばならない。ところで神名と一つである神の神的人格は、人間の被造的人格を基準にして人格と判断されるものではない。この故に、カトリックの神学者H・キュンク（Hans Küng）は、被造的人格概念に対しては「神は人格より以上である！」と述べ、あるいは又「神は人格以下のものでもない！」と述べて、「全てのカテゴリーを破裂せしめる、完全に通約不能な神の本質には、神が人格的でも非人格的でもなく、しかも同時に双方であるが故に、かくして超人格的であることが所属する」と考察するのであろう⁽⁷⁾。エックハルトのようなすぐれた神秘主義思想家が「離脱」を語

り、それについて神と人間との「人格的關係をも超えた關係」が指摘される⁽⁸⁾のも、神の神的人格が、人間への關係においても、被造的人格に対する絶対的超越性を維持しているからに他ならないであろう。永遠の三位一体の神における父・子・聖霊というペルソナの三者は、一なる神的人格である神的本質の永遠に三度の自己反復なのである。神は御自身においては非人格ではなく、神のペルソナ性（神的人格性）は被造的人格を超越しているのであり、この故にこそ、人間の側での深い神秘主義的経験が生起するのであると考えられる。三位一体の神のペルソナ性（神的人格性）の絶対的超越性こそ、深い神秘主義的経験とその思想の根柢なのである。

神学史の研究においては、聖アンセルムスの『プロスロギオン』における「唯一の論証 (unum argumentum)」ともされる「それよりもより大いなるものが思考されえぬもの (aiquid quo maius cogitari non potest)」は神名として理解されえる⁽⁹⁾。この神名を哲学者のJ・ミューラー (Jörn Müller) は『プロスロギオン』における聖アンセルムスによる神の存在の論証の出発点をなす神の定義と理解し、それをAQMという略号で表記し記号化する⁽¹⁰⁾。さらにミューラーはガウニローの“omnibus maius”をOM⁽¹¹⁾、聖アンセルムスの“id quo maius cogitari non potest”をIQM⁽¹²⁾という略号でそれぞれ表記し記号化して、言語哲学的な手法で『プロスロギオン』の聖アンセルムスによる神の存在の論証を分析し理解しようとする。その理由に相当することをミューラーは次のように述べている。

「アンセルムスは後になって、明確にカトリック信者としてのガウニローに宛てて述べることになるのであるが、神を否定する愚者は非信仰者であり、この愚者に対しては論証行程の戦略上の諸理由からして、同信の宗教者である対話のパートナー達によってだけ受容されるであろう諸前提をもって作業してはならない。」⁽¹³⁾

このような立場で、ミューラーは聖アンセルムスの『プロスロギオン』における神の存在の論証を解釈しようとするのである。ミューラーによれば、AQMは、単なる固有名ではないのであって、もしそうならば、それは《Jahve》や《Elohim》のように、《Deus》の、意味論的意義においては (im semantischen Sinn) 本当には重要ではない代替標識になってしまう⁽¹⁴⁾。AQMを、ミューラーは標識表現 (Kenzeichnungs Ausdruck) に相当するとする。標識表現とは、例えば「アメリカ合衆国の第44代大統領」がバラク・オバマ (Barack Obama) の標識表現であるように、叙述によって一義的に、特定の一つの客体的対象 (Objekt) を指定する (benennen) ものである⁽¹⁵⁾。ミューラーは『プロスロギオン』における「唯一の論証」(unum argumentum——これはミューラーによってdas UAと表記される——)としてのAQMを標識表現と理解する際の二つの本質的利点を、これを概念としたり固有名としたりする理解に対してあげている。それは次のとおりである。

- (1) 概念に対しては、アンセルムスの論証行程の目論見にとっては最終的に断念不可能な、表示された客体的対象の唯一性 (Einzigkeit) が保証された。
- (2) 固有名と比べると、標識表現は、『プロスロギオン』で展開されているようなタイプの諸論証過程をおよそ初めて許容する、より豊饒な意味論的構造を示す。⁽¹⁶⁾

尚、ミューラーは、AQMがIQMとされることに関して意味論的重要性を見てとり、《何か (etwas) 》場合によっては一般的なるものを表示する述辞子であるAQMから、特殊な

《それ（Das）》を標識する指示子が密かに出来上がったとして、その積極的意味を認めているが、ミューラーにとってIQMは、一神教の神概念に特徴的な「唯一性」をより良く把握し、上記（1）をより堅固にするものであったのである⁽¹⁷⁾。以上の二つの利点は、聖アンセルムスの『プロスロギオン』の第Ⅱ章～第Ⅲ章が、「AQM（＝神）は存在する」が分析的陳述であることを目指すことによって確信される。その真理は意味論的には「独身者たちは、未婚である」と同様の分析命題のレベルを動くものなのである⁽¹⁸⁾。ミューラーによると、標識表現AQMにおける神の存在の分析性は、その顕在化を目指されたものであるとはいえ、『プロスロギオン』の第Ⅱ章～第Ⅳ章で常に「隠蔽された分析性」として初手から自覚されていたものであったということになる⁽¹⁹⁾。即ち、「AQMは存在する」という分析命題は、「 $345 \times 367 = 126615$ 」という事が「 $2 \times 2 = 4$ 」という月並みな数式ほどすぐには我々に分からなくとも、幾許かの計算を経て確実になるのと同様の分析命題としての特質を所有することになるのである⁽²⁰⁾。非信仰者を説得する戦略として、『プロスロギオン』の神の存在の論証を理解せんとするミューラーの試みには、それとして関心を引くものがある。しかし、聖アンセルムスの『プロスロギオン』でその存在（と本質あるいは本質的諸完全性）が論証されている神は、教会によって信仰された神（三位一体の神）であり、聖アンセルムスは、教会の客観的信仰を信頼し承認する自らの主体的信仰（fides quaerens intellectum）から内発する理性的探究としてこの論証を遂行しているのである⁽²¹⁾。なぜなら、非信仰者である愚者にも教会が宣教する神を伝達せねばならないからである。従って、ミューラーのように、掛け算の数式と同様のものとして、「AQMは存在する」という分析命題を説明する解釈は当を得たものとはいえない。もとよりミューラーが自身の解釈を説明するにあたり、上記の「 $345 \times 367 = 126615$ 」と「 $2 \times 2 = 4$ 」とを用いても、ミューラーの論文の読者が、本稿の筆者とは異なり、暗算を得意とする者である場合、あまり意味をなさないのではないだろうか。

ともかくも、聖アンセルムスの言う「それよりもより大いなるものが思考されえぬもの」は神名（神のみに固有の固有名）として理解するほうが正しいであろう。これにより神の超越的な神的人格としての尊厳性と、それに伴う人間理性に対する神の秘義性が確証されるとともに、神の名は、神の存在と本質（あるいは本質的諸完全性）と同一である⁽²²⁾が故に、唯一の神の名を唯一の論証とする叙述は、充実した神論の展開へとつながるのである。従って又、AQMを標識表現として、固有名（詞）とする理解を退けるミューラーによる上記（2）の解釈の提言は、『プロスロギオン』には不適切且つ不必要であるし、キリスト教神学の神論はまた、神に関しては神の唯一性に応じた単独概念の創出に努力を傾けるのであるから、ミューラーの上記（1）の提言も不適切且つ不必要であろう。例えば神学の神論は、神の知恵を、単に知恵とは言わず、「最高の知恵」等と言うのである⁽²³⁾。しかもこの神論における単独概念の創出は、客観的信仰を主体的信仰が承認し信頼する事から出発する信仰の認識理解の一環なのである。結局ミューラーは、神の固有名を記号化し標識表現とした際、唯一の神の尊厳に満ちたペルソナ（神的人格）を他の全ての存在者を包括する記号化された世界の一般性のうちに溶解し解消したことになるのではないだろうか。神の固有名から神の神的人格の尊厳性を捨象したものが、ミューラーの標識表現AQMであったと言えよう。ミューラーの場合、神の存在を否定する非信仰者に、論理にお

いて神の存在を納得させることがあり得ても、知性と現実における神の存在を信仰において承認させるところまでは到達しえないであろう。別にそれでもかまわないではないかとの意見もあり得ようが、少なくとも聖アンセルムスの『プロスロギオン』の研究ということになれば、聖アンセルムスが神学者であり、神学者として哲学の問題を受け止めていたことがもっと前面に押し出されるべきであると考え。ミューラー自身は、聖アンセルムスの論証のうちに、絶対的なものの内在と超越の、新プラトン主義的弁証法を認めている。この弁証法において、神は人間の思考に単に外的で純粋に精神外的な対象として理解されてはならないこと、即ち最高存在として神は、理解可能なものとして常にまた人間精神内に (in mente hominis) 在る (=与えられて在る) こと、しかもそれは、人間が理性そのものによって、より高次の、人間には部分的に接近可能ではあってもしかし結局はまた人間を非常に卓越し凌駕してゆく現実に参加する限りである⁽²⁴⁾ ことを述べている。このような新プラトン主義的弁証法は、超越的な最高存在と人間存在との非連続的・連続的、連続的・非連続的な存在連関の理法を言うのであるに相違ないであろうが、このような聖アンセルムスにおける哲学の受容は教会の神学者の立場でなされており、最高存在とは、唯一の神的人格の固有名として存在する神なる御者のみに固有の存在なのである。

固有名から切断された個別的人格は、人格一般の理念のうちに解消され、単なる記号とされた固有名は、絶対に代替不可能な個別的人格から切断される。それが人格の危機を招来する場合、唯一の神の固有名(神名)はそれを禁止するのである。神はこのように、被造的諸人格を神の前における真の自己の発見へと招いているのである。

註

- (1) Vgl. Hans Bietenhard, ὁνομα, in: *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament* V, op. cit., S. 257.
- (2) *Ibid.*, S. 254.
- (3) Friedrich Hartenstein, Personalität Gottes im Alten Testament, in: *Marburger Jahrbuch Theologie XIX. Personalität Gottes*, S. 19-46, Evangelische Verlagsanstalt, Leipzig, 2007, S. 31f.
- (4) Vgl. Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 26. Aufl., 1979.
- (5) Karl Barth, *Die kirchliche Dogmatik II/1*, S. 306. カール・バルトのようなプロテスタントの神学者の教義学の著作を、本稿のような基礎神学的考察の叙述において用いることに違和感を持たれる向きがあるかもしれない。しかし、バルトの教義学の三位一体論・神論は、教義学以外の、しかもカトリックなど他の立場の神学の諸学科・諸部門にも有益な考察を与える普遍性を備えるほどの深さに到達していると言える。もとより教義学は、神学の他の諸学科・諸部門と密接に関連しているのである。
- (6) *Ebd.*
- (7) Hans Küng, *Existiert Gott?*, Piper, 1995, S. 692f.
- (8) 西谷啓治, 『神と絶対無』(西谷啓治著作集, 第七巻, 1987年, 創文社), 11-15頁。
- (9) Karl Barth, *Fides quaerens intellectum. Anselms Beweis der Existenz Gottes im Zusammenhang seines theologischen Programms*, Gesamtausgabe II/13, 1986, TVZ, S. 75ff; 印貝徹, 『アンセルムス研究』(新教出版社, 1951年), 105頁以下; Michel Corbin, S.J., *La Pâque de Dieu*, Cerf, Paris, 1997, p. 17 sqq.
- (10) Jörn Müller, Ontologischer Gottesbeweis? Zur Bedeutung und Funktion des *Unum Argumentum* in Anselm von Canterburys *Proslogion*, in: *Anselm of Canterbury (1033-1109)*

—*Philosophical Theology and Ethics*, Porto, 2011, S. 37-71, S. 42ff.

- (11) *Ibid.*, S. 42.
- (12) *Ibid.*, S. 47.
- (13) *Ibid.*, S. 49f.
- (14) *Ibid.*, S. 47f.
- (15) *Ibid.*, S. 48.
- (16) *Ibid.*, S. 48f.
- (17) *Ibid.*, S. 47.
- (18) *Ibid.*, S. 50f.
- (19) *Ibid.*, S. 50ff.
- (20) *Ibid.*, S. 51f.
- (21) 拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』（サンパウロ、2013年）、第2章、第3章などを参照。
- (22) 人名の場合は、必ずしもこのようなわけにはゆかない。われわれ人間においては「猪熊虎五郎」という名前でもとても弱気な人もいたといったようなことはよく知られている。人間の場合は、必ずしも名は体（本性）を表すわけではないのである。それにもかかわらず、人間においても、そのペルソナとして有する固有名は人格の受肉として尊厳に満ちているのである。人間の場合は必ずしも名は体を表すわけではないと述べたが、哲学者のDavid Lauerが示した『ロミオとジュリエット』の例、即ちジュリエットがロミオの人格をこの上なく愛するが故にロミオの固有名「ロミオ・モンタギュー」を憎む場面などは、創作された悲劇におけることとはいえその極限の場合であろう（Vgl. David Lauer, Wittgenstein und die Gewalt des Namens, in: David Lauer | Freie Universität Berlin-Akademie.edu, <http://fu-berlin.academia.edu/DavidLauer>, 07.08.2013, S.14f.）。これこそ、固有名に人格の尊厳が分かちがたく一体化しているが故に生じる悲劇なのであると考えられる。即ち、固有名は人格を識別する単なる記号ではなく、むしろ固有名は代替不可能な人格が受肉した記号であるので、固有名に受肉しているこの代替不可能な人格の尊厳を決して承認しない共同体や社会の事情の故に、劇中でロミオとジュリエットの人格の尊厳は、死をもってしか貫徹できなかったことになるのではあるまいか。その際この二人にとって重荷であったのは、実際には彼らのファミリーネーム（姓）であったのである（シェイクスピア、『ロミオとジュリエット』〔中野好夫訳、新潮文庫、2013年〕参照）。
- 念のため、人名に関して別の事例を追加しておく。K・バルト（Karl Barth）は、その『ローマ書』（第二版）の序言において、自らの聖書釈義に関して、「もはやほとんど文書そのものの謎の前にではなく、ほとんどただSacheの謎の前にだけ立つ」「地点まで突進せねばならず」、ここでは「それ故、私が著者ではないことを、私はほとんど忘れ、私は彼をして私の名前（固有名）において語らせ、私自らは彼の名前（固有名）において語ることがほとんど出来るほどまでに、彼を充分理解したことになる」旨のべている（Karl Barth, *Der Römerbrief*, 12., unveränd. Abdr. d. neuen Bearb. von 1922, TVZ, 1978, S. XII. 訳文の（ ）内引用者）。これなどは、もちろん聖パウロとカール・バルトの固有名並びに人格が取り替え可能であるなどということを行っているわけではなく、聖パウロの「ローマの信徒への手紙」のSacheが当然、この手紙を神学的に探究するカール・バルトのSacheであるという事を言っているのである。この神学的Sacheが聖パウロとカール・バルトにとっては同一であるとの主張なのである。神学的Sacheのこの同一性によって、カール・バルトは聖パウロを理解しうるのである。神学的Sacheについては、さらに次章後半を参照。
- (23) 本章の註（21）で示した拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第1章、第12章等参照。
- (24) Jörn Müller, op. cit., S. 69.

Ⅲ. ペルソナ的（人格的）対象の固有名

文化人類学者のレヴィ＝ストロースは、南米（ブラジル）・アマゾン川支流域で生活するナンビクワラ族の人々の固有の名前について次のような報告をしている。

「ナンビクワラ族は、少しも気むずかしいところはなかったが——私という民族学者の存在も、私のノートや写真機も、いっこうに気にならなかった——、ことばの問題があるので、私の作業はめんどろだった。まず、個人をその固有の名で呼ぶことは、彼らの社会では禁じられていた。ある個人をさし示すには、電信線で働く人々の慣用にしがわなければならない。つまり、とりきめてあるきまったあだ名を使って呼ばなければならない。」⁽¹⁾

「初めの女の子は、仕返しをするために、喧嘩相手の名前を私に教えにきたのだが、相手のほうはこれを知ると、さらにそれへの報復として、初めの女の子の名前を言いつけたのだ。」⁽²⁾

「このことがあってからは、子供たちをたがいに対立させることによって、やや乱暴なやり方ではあるが、容易に子どもたち全部の名前を知ることが出来た。そのあとこうしたやり方のために、ちょっとしたもんちゃくが生じた。というのは、子どもたちは大人の名前も、たいした困難なしに私に教えてくれたからである。大人は私たちのこの密会を知ると、子どもをしっかりとつけ、私の情報源は涸れてしまった。」⁽³⁾

以上の引用文中の、「固有の名」あるいは「名前」とは固有名に相違ないであろう。固有名を顕わにすることの禁忌は、固有名として現れる各々の個別的人格の侵犯しがたい尊厳性、聖性の故ではないだろうか。ナンビクワラ族の事例は、固有名の尊厳、ひいては個別的人格の掛け替えのない聖性を証示していると理解できる。人間の固有名はさらされすぎてはいけないのである。これとの関連で『旧約聖書』「創世記」11章1～9節のバベルの塔の物語も理解できるのではないだろうか。「天まで届く塔のある町を建て、有名になろう（自らに名前を創ろう）」とした人々のあいだに言葉の混乱が起き、人々は全地に散らされたのである。神の裁きによる試練であるかもしれぬが、過度に有名になり神の如くになろうとして却っておのが人格としての尊厳を損傷してしまう愚かさから人々は守られたのである⁽⁴⁾。われわれ、現代人の通常の生活においても、有名になりすぎることは、自分を見失わせて人格としての諸個人を危機に追い込むこともあるであろう。それほどまでに、固有名として現れ、固有名として存在する個別的人格は尊いのである。

哲学者のD・ラウアー(David Lauer)はL・ヴィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein)の『哲学的探究(Philosophische Untersuchungen)』に言及しつつ、「名前(固有名)の授与・貸与」を「人格としての個体(個別者)を他者たちにとって呼びかけ可能にする」こととしている。ならば、同姓同名の者らの個別的人格の区別はどのように説明されるのだろうか。この区別は、同姓同名の者らが、同じ社会的歴史的環境を生きる場合ますます困難になるのではあるまいか。むしろ、人格として呼びかけ可能な人格が、自らの名(固有名)として出来^{しめたい}るのである。ラウアーの思索は、固有名における人格の秘義の前^{しめたい}にまだ到達していないのではないだろうか。ラウアーが言うように、人間は、社会的実践、分け与えられた生活形態へと加入させられ、社会化されることによってのみ、思考し、語

り、行動する人格になるのだろうか⁽⁵⁾。固有名という出来事がわれわれに強いる考察は、その授与・貸与によって人格としての誰かを他者たちから呼びかけられざる者にする、とか、あるいは人格を社会的諸連関において成立させるとする観察だけでは捉えきれないペルソナ的存在の深みへと進まざるを得ない。名付けのような固有名の授与・貸与は、社会的実践や生活形態などへの加入過程に根源を得ているのではなく、社会的諸連関の根底にあって、それを真に基礎づけている個別的人格の秘義を根源としそれによって生起する事なのである。ペルソナ（人格）が自らの固有名を要求するのである。固有名において個別的人格は言わば受肉し、個別的人格の各々は固有名として存在するのである。ペルソナ（人格）の存在はその固有名そのものであり、あるいはペルソナ（人格）の存在はその固有名となるべきものなのである。

古代の後の中世以降受け継がれたペルソナ（人格）の定義としては、ボエティウスの「理性的本性の個別の実体」という定義がよく知られているであろう。中世12世紀のサン・ヴィクトル学派の神学者サン・ヴィクトルのリカルドゥス（Richardus de St. Victore）によれば、ペルソナ（persona）という名辞は、人間や天使のごとき理性的実体（*rationalis substantia*）のみを表示し、しかも何らかの唯一の特殊な実体を表示する。さらにリカルドゥスはペルソナという名辞を、個別的で、特殊で、非共通的な固有性、*quis*（誰）を認識しあるいは表示するのに適しており、それを《固有名（*nomen proprium*）》と結びつける。即ち、ペルソナという名辞は、特殊な固有性によって他のすべてのものから区別された唯一の一人の誰か或る者を認識するのに有効なのである⁽⁶⁾。20世紀になると、M・ハイデガー（Martin Heidegger）が、『存在と時間』の中で、ペルソナの尊厳を主張せんとするM・シェラー（Max Scheler）の意を受けて、「Person（人格）は、決して物（*Ding*）でも、実体（*Substanz*）でも、対象（*Gegenstand*）でもない」と述べている⁽⁷⁾。そうすると、現代では、ペルソナを実体と捉えようとする中世と対立する考え方が登場してきたように思われるかもしれない。しかし、上記のハイデガーからの引用が述べんとするところは、人格（ペルソナ）という事柄を、《私》が己の方から、己の関心に従って見立てたとおりに物の如く実体として固定的に実在する対象（*Gegenstand*）とすることはできない、他者であれ自己であれペルソナを自らの関心のとおりに対象化できないとの謂である。従って、*Gegenstand*（＝*Gegenstand*）という語をもって考察するならば、中世においてペルソナは、人間であれ天使であれ（また神であれ）、《私》が私の関心に従って、私の側からそのような物として構成し対象化するものではなく、《私》の全作用遂行の極限・限界の外側から、《私》に対向して（*Gegen*）立ち屹立する者、《私》の作用遂行に反発拒絶する否定性をもって対向する者として、そして、そのような屹立する者として対象（*Gegenstand*）であり、その尊厳と聖性が《実体》として承認されていたと言うべきであろう。そのようにペルソナの尊厳と聖性が承認される際、それはその固有名と結び付けられていたのである。又、晩年のシェラーは、人格の存在は客体化できないとし、「他人達の諸人格もまた、諸人格として対象化できる（*gegenstandsfähig*）ものではない。（この意味においてゲーテはリリーについて、彼（ゲーテ）が『彼女をあまりに愛しすぎたので』、彼は彼女を『観察する（*beobachten*）』ことができなかった、と言うのである）」と述べている⁽⁸⁾。ゲーテやリリーは固有名にほかならない。この問題に関して、シェラー

や、シェーラーとは逆に自らはペルソナ忘却の道を歩むことになったと理解できるハイデガー⁽⁹⁾の所説についてはここでは特に詳述しないが、既述の如く、時代の相違がもたらす事態を、*Gegenstand*という語をもって考察するなら、現代においても、ペルソナが《私》に対向して屹立する事を、固有名という事柄との関連で重視すべきなのではあるまいか。中世では、対向し屹立するペルソナの人格存在を尊重する故に、それが対象(*Gegenstand*)であることを把握して、ペルソナが理性的本性の個別的「実体」とされ、20世紀では、中世と同様に、ペルソナの対象(*Gegenstand*)としての対向する屹立性が自覚されて、ペルソナは観察主観に対する自らの対象化を拒み、物や実体ではないとされたのである。しかし中世においても、現代においてもペルソナ(人格)はその固有名と結ばれているのである。

現代では神学においてさえも、神学的Sache(ザッヘ)について、「この多くとなえられた《Sache》は対象(*Gegenstand*)として把握されえず、《対象性(*Gegenständlichkeit*)》として把握されねばならない、即ちSacheは客体化できないのである」などと言われる。それは、信仰者以外のあらゆる人々にとって、神学的Sacheが、「単なる主観的な假定(bloße subjektive Annahme)」として現象するからだとのことのようなのである。これは、プロテスタントの神学者G・ザウター(Gerhard Sauter)の意見である⁽¹⁰⁾。しかし、事情は逆なのであって、神学において*Gegenstand*(対象)とは、まず第一義的には神御自身であるが、さらに神学のみならず、人間の様々な事柄を探究する一般の諸学問においても、研究者の《私》(観察し認識する主観、探究する主体)の外からさし向ってくる*Gegenstand*(対象)としてのペルソナの尊厳・聖性、認識上の秘義性を自覚することが必要であると考ええる。《私》によって見立てられ、見定められ、あるいは表象され構成された限りでの対象性としての対象ではなく、《私》に対向し屹立する、秘義的な対象としてのペルソナの復権こそ喫緊の課題であろう。ペルソナの復権とは固有名として現れる対象の復権なのである。中世においては理性的本性の個別の実体であるというペルソナ一般の定義に関する議論を巡って、ペルソナが自らの動的現実の支配(dominium sui actus)の所有者であり、特に自己自身によって活動することが聖トマス・アクィナスによって指摘されている⁽¹¹⁾。中世においてもペルソナの理性的特質やその意志・行為の自発性が極めて重視されており⁽¹²⁾、それを受けて近代にいたってからも人格としての人間の意識の覚醒・明晰性や意志的行為の自発性が、人格であることの決め手として挙げられると考えられるが、このようなことは、根源的な次元に立ち帰って言えば、ペルソナがその固有名として《私》に対し屹立する秘義的な尊厳と聖性を伴う対向存在者(*Gegenstand*・対象)であるからに他ならない。固有名あるいは名の現実からペルソナ(人格)が剥離されると、本稿の序でふれたような、冤罪事件など、本来は掛け替えのない人格の、あってはならない取り替えが起こってくるのであるとも考えられる。同姓同名の事実によっても決してゆるがせにされない固有名によって、まさしく固有名であることによってこそペルソナはペルソナとして現れる。従って、障がいを負うなどして意識がなくなったり意志の自発性が持てない場合でも、人間はその固有名のゆえに掛け替えのないペルソナであり、あるいは又、記憶喪失などで自分の名前が分からない場合や、まだ名前のない胎児の場合でも、名を持つはずのもの、名を持たねばならない者として人間は掛け替えのないペルソナなのである。固有名

として現れるペルソナの復権こそ、現代における人間の復権なのではないだろうか。その固有名によって人間が他者から呼びかけられ、語りかけられのは、固有名を通して人間が、永遠なる御者へと結ばれているからである。このことを自覚することにより、あらゆる人間諸科学、あるいは自然科学も含む諸科学は自らを巻き込む解釈学的循環を自覚し、己の権限とともに限界をも健全に知ることになり、哲学や宗教との関係において本来の科学としての探究に向かうことができよう。M・ハイデガー（Martin Heidegger）は次のように述べている。

「諸学問（自然科学も含む）は、現存在（Dasein）の存在諸様式であり、この存在諸様式において現存在は、それ自らは現存在である必要のない存在者にも関係する。まさに現存在には、ある世界における存在（Sein in einer Welt）ということが本質的に帰属するのである。従って、現存在に帰属する存在理解は、《世界》というようなものについての理解（das Verstehen）と、世界の内部で近くなる存在者の存在の理解（Verstehn）とに、等根源的に連関する（betrifft）。」（訳文の最初の（ ）内引用者）⁽¹³⁾

『存在と時間』におけるハイデガーによれば、「現存在」とは「人間」を術語化したものであり、それは人間に他ならない⁽¹⁴⁾。自らの存在において、この《存在そのもの》が問題となるような存在者、即ち存在論的に存在する事が、その存在的卓越性である現存在⁽¹⁵⁾の存在の仕方として、諸科学をはじめとする諸学問は成立しているとするのである。哲学や神学は、《原子力発電の安全神話》⁽¹⁶⁾のようなものを生み出す、技術開発と合体した科学の自己絶対化とそれに伴う科学の神話化・（自らの限界を逸脱した）宗教化を阻止し、人間の復権に資する学術の方向付けを模索することを課題の一つとせねばならぬ場合もあろう。さらに、神学は、自己と世界の全体性の被岸、ハイデガーがその意味を問い求める存在⁽¹⁷⁾をも絶対的に超越し、より高く深く広大な、自らの名（神名）である唯一の神（イエス・キリストの神）の人格存在とその世界への関与と内在を探究する学として、自らにふさわしい形而上学の模索と受容に努めねばならない。

ペルソナの固有名は、確かに、文字などによって表示されえ、語や概念（単独概念）として意義や意味を所有して表示されたもの（神や人間など）を示し、発話されるのであるから、それは確かに記号であると言いうる。しかし、真に掛け替えのない個別の人格が、記号として受肉したところのものがペルソナの固有名なのである。即ち、世界内で、またより具体的には社会の中で、個別の人格の真に掛け替えのない尊厳は固有名として受肉しているのである。従って、本来ペルソナの固有名は、共通の種や類に分類されることを拒絶し、同姓同名の者らも、その各々の人格としての個別性が尊重されねばならないのである。人間の固有名は、人間相互の尊厳を承認せしめる橋頭保であり、それはまた超越者たる御自身の名としての神への開けでもあるのである。このような固有名におけるペルソナの諸関係の自覚とともに、個々の人間は己の地上の命を真に尊ぶことを知ることになるのではあるまいか。本稿においては、真の宗教は、永遠の神名（神の固有名）とあらゆる人間の固有名との存在連関として確立することが述べられてきたとも言える。そのような真の宗教は、イエス・キリストの名において啓示され、最深の基礎を与えられている。キリストの神秘体としての教会とは、以上のごとき名におけるペルソナの諸関係の媒介とな

り、自らもそれらを結びつけるペルソナ的存在者として、神とこの世界の間にあって、その原秘跡的使命を全うするのであると言えよう。

註

- (1) クロード・レヴィ＝ストロース、『悲しき熱帯』、川田順造訳（『世界の名著』59所収、343～559頁、1974年、中央公論社）、521頁。
- (2) 同上、521頁。
- (3) 同上、521～522頁。
- (4) 『旧約聖書』「創世記」第11章1～9節参照（『聖書 旧約聖書続編つき』[日本聖書協会、1988]；*Neue Jerusalem Bibel*, Herder, 1985.）。人間の固有名の尊厳は、みだりにならなくてはならない神名の尊厳（『旧約聖書』「出エジプト記」第20章7節参照）に対応しているのである。尚、『新約聖書』「使徒言行録」第2章参照。
- (5) 以上、David Lauerの所説については次を参照。David Lauer, Wittgenstein und die Gewalt des Namens, op. cit., S. 8.（このLauerの論文の所在については、本稿第Ⅱ章の註（22）を参照されたい。）Lauerが示す次元にのみ留まるのであれば、固有名における人格の秘義は哲学的考察の中で抹消されえることになるであろう。固有名をめぐる因果説と記述説の対立などに至れば、この対立は、双方が固有名を専ら記号としてのみ考察し固有名をペルソナ（人格）から切り離すが故に成り立っていると考えられる。因果説と記述説については次のものを参照させていただいた。上林洋二、「固有名の意味論」[『文学部紀要』文教大学文学部14-1号、44-53頁。http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKK0000374、2012年6月2日]。ペルソナの固有名は、記号としての局面を有するゆえに、もちろん因果節や記述説のような諸説があってもよいのであろうが、代替不可能なペルソナ（人格）の記号としての受肉が、ペルソナの固有名なのである。絶対に代替不可能なペルソナが、その固有名と一体化し一つとなっている事が忘却されてはならないのである。
- (6) Richardus de St. Victore, *De Trinitate*, publié par Jean Ribaillier, Vrin, 1958, 4 VI-VII 168-170. 前掲の拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第12章参照。
- (7) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, 1979, S. 47. シェーラーは次のように述べている。「……ただ志向的諸作用の遂行においてのみ実存し生きることが、人格（die Person）の本質に所属する。従って人格は、本質的に決して＜対象＞ではないのである。」（Max Scheler, *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*, Gesammelte Werke, Band 2, Francke Verlag, 6. Aufl., 1980, S.389.）
- (8) Max Scheler, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, in: Gesammelte Werke, Band 9, Francke Verlag, 1976, S. 7-71, S.39.
- (9) 例えば「他者」をめぐるハイデガーは、「現存在の世界は共世界（Mitwelt）である。内・存在は他者たちとの共存在（Mitsein）である。この他者たちの世界内的な自体存在（Ansichsein）は共現存在（Mitdasein）である」と述べている（Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, op.cit., S.118.）。ハイデガーによれば、他者たちは「手もとにあるペルソナ諸事物（vorhandene Persondinge）」として出会われるのではない（*Ibid.*, S.120.）。他者は第一義的にはその仕事（Arbeit）によって世界内存在であり（vgl. *Ibid.*, S.120.）、「環境的に配慮されたことにおいて他者たちは彼らであるところのものとして出会うのである」が、「他者たちとは、彼らが従事促進する（betreiben）ところのものなのである。」（*Ibid.*, S. 126）ハイデガーの実存にとって、他者とは、それが従事促進する仕事によって有意義なだけの存在者であり、それ以上のものではないのではないだろうか。この故に、上記の如く、ハイデガーは既に『存在と時間』において「ペルソナ（Person）」という語から遠ざかろうとしていると考えられる。ハイデガーの実存にとって本来的に有意義であるとされる民族的「英雄」（Vgl. *Ibid.*, S.384f.）以外は、ハイデガーにとって他者とは、「それが従事促進する（betreiben）ところのもの」である「ひと（Man）」（*Ibid.*, S.239.）でしかなく、それは他者というよりは、極めて他人的な存在者であったのではないだろうか。しかも、民族的英雄であっても、それは、自らが密かにそれに取って代わりたいハイデガーにとっては、他者というよりは他人的な存在者にすぎなかったのではないだろうか。しかし、仕事における有意義性以上のものとして、あるがままのその存在の異質性により新しい未

知る世界を示しあるいは予観（予感）させざるを得ない者として、他者とそのような他者と出会う私は、各々の固有名としてのペルソナである他は無いのである。そしてそのような固有名としてのペルソナの世界は、民族性への呪縛から解放された、愛を根幹にする価値と責任の世界なのである。

- (10) Gerhard Sauter, *Theologie als Wissenschaft. Historisch-systematische Einleitung*, in: *Theologie als Wissenschaft*, Theologische Bücherei 43, Chr. Kaiser, 1971, S.9-72, S. 59.
- (11) St. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, 1,q.29,a.1, Respondeo.
- (12) 前掲の拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第5章、第11章参照。
- (13) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, op.cit., S. 13.
- (14) *Ibid.*, S. 11.
- (15) Vgl. *Ibid.*, S. 12.
- (16) 白井聡, 『永続敗戦論』, 太田出版, 2014年, 第1章第1節は参考になった。
- (17) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, op. cit., S. 5. 畢竟、ハイデガーが問い求める存在の意味とは存在であるわけだから (Vgl. *Ibid.*, S. 14f, 17, 86, 152.); 存在は<他のもの>と取り替え可能である。この可能とは、ハイデガーにとっては、自らの実存の存在可能 (Seinkönnen) なのであると了解できる。この故に、存在は、概念としては万物に共通する最高類概念のごとき類 (Gattung) ではないが、「存在」という概念が最も一般的な概念 (der allgemeinste Begriff) であり、しかも最も暗い概念であることに注意が向けられたりするのである (*Ibid.*, S. 3.)。さらにこの故に又、ハイデガーにとっては、存在とは、時間性 (die Zeitlichkeit [*Ibid.*, S.17, 404f, 436.]) であったり、死 (*Ibid.*, S. 258ff, 313.) であったり、ナチスの支配力によって高揚されたドイツの民族性 (Vgl. Wilhelm Raimund Beyer, *Vier Kritiken: Heidegger · Sartre · Adorno · Lukács*, Pahl-Rugenstein Verlag, 1970, S. 15-33.) であったり、あるいは古代ギリシアのφύσις (Martin Heidegger, *Vom Wesen und Begriff der φύσις*, Aristoteles, Physik B, 1, in: *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, 3. Aufl., 1996, S. 239-301, S. 260, 281, 299ff.) であったりなどし得たのであると考えられる。これに対して、キリスト教神学が探究する神の存在は、唯一の人格的な神御自身であるが故に、<他のもの>とは絶対に取り替え不可能である。まさに神は唯一の御者なのである (『旧約聖書』「出エジプト記」第20章3節, 「申命記」6章4節参照。cf. St. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, 1,q.11,a.3, Sed Contra.)。ハイデガーの哲学から、諸学問・諸科学は様々に学ぶことができよう。現代では、カトリック神学もプロテスタント神学も、ハイデガー哲学との交流や折衝の跡を示している。そのような神学の営みをなした者として、ここでは、カトリック神学者K・ラーナー (Karl Rahner) とプロテスタント神学者R・ブルトマン (Rudolf Bultmann) の名を挙げておくに留める (Vgl. Wolfhart Pannenberg, *Anthropologie in theologischer Perspektive*, 2. Aufl., Vandenhoeck & Ruprecht, S. 135f, 19.Anm.8.)。しかし神学は、ハイデガー哲学に対してどのような態度をとるにせよ、ドイツの民族性への肩入れによって呪縛されて不自由になり、ナチスへの賛同という倫理的に悪質な政治的誤謬を犯すハイデガー哲学の傾向性に関しては惑わされてはならず、哲学よりもより根源的な学としての自らの立場からこの哲学を点検する作業をなさねばならない。このようなことは、神学がハイデガー哲学とかわる際の注意事項であるのみならず、およそ神学と哲学との関係を考察する際、場合によって様々であろうが神学者が常に自覚しておらねばならぬことである。

Der Eigenname der Person——Eine fundamentaltheologische Skizze

Toru Sasaki

Das unverwechselbare Personsein verkörpert sich als sein Eigenname. Deshalb soll zum Beispiel jeder von zwei Menschen, deren Eigennamen die gleichen Vor- und Familiennamen sind, nicht mit dem anderen verwechselt, sondern in der Gemeinschaft oder in der Gesellschaft als die unverwechselbare Person besorgt werden. Der Eigenname der Person ist das Geschehen der Fleischwerdung des unverwechselbaren Personseins, das es verbietet, den Eigennamen in der Welt der Persönlichkeit immer nur als ein blosses Zeichen zu betrachten. Die im Eigennamen erscheinende Würde der Person (*persona*) darf nicht ausser Betracht gelassen werden.

Mit dem oben gezeigten Gedanken ueber den Eigennamen der Person kann das fundamentaltheologische Denken geführt werden, das das persönliche Verhältniss von Gott und Mensch als die wahre Religion zur Sprache bringt und mithin das christologische bzw. ekklesiologische Gebiet erreicht. Dabei muss sich die Theologie als eine noch ursprünglicher als die Philosophie denken muessende Wissenschaft in ihrer Weise die nach der Transzendenz forschende Metaphysik zu eigen machen, weil der Gegenstand der Theologie das göttliche Geheimnis ist.